

## (2) 「米国の中等教育・特別支援教育の立場から」

元マサチューセッツ大学教育学部Senior Lecturer ノーラ・スティーブン

ノーラ・スティーブンと申します。皆さま方にお話しできて、非常に光栄です。

私は教育者です。これまで多くの機会を得て、就学前の子どもたちから大学に至るまで、子どもたちと交わってまいりました。そして、私たちは、接続・移行に関して1つの問題があることに気づいたのです。小学校から高校に至るまで、そして高校から高等教育に至るまで、子どもたちをうまく送り出してやるには、さまざまチャレンジがあります。そして、私は、その専門の領域からいきましても、特に、特別なニーズを持つ、つまり障害を持つ子どもたちに着目して、研究してまいりました。きちんと社会の中で受け入れてもらえる環境をつくらなければいけないと考えてまいりました。

このプレゼンテーションを始めるにあたり、引用させていただきたいと思いますが、アレクサンドラ・シーバというドキュメンタリー映画制作者は、次のように言っています。「“There are many different ways of being a person” 人となる道は多様に存在する」と。私たちはきちんと機会を提供されているか、社会に貢献をなし得ているか、そして、スキルを最大限活用しているかどうかということです。私たちは社会の中で価値ある存在として認められているかという問いです。これは、今日の私の話の中でも重要な側面となります。

それでは、始めさせていただきます。まず簡単ではありますが、米国における教育システムを説明したいと思います。幼稚園から高等学校までの時期に焦点を当てて、アメリカにおける教育のありようについてお話しします。そして、障害を持つ子どもたちのアクセシビリティを高めるための、どのような形の接続・移行があるかということです。私たちは、全て、高等教育に対するアクセスを持つべきです。高等教育機関へのアクセスを持ち、そこに参入するためのサポートを得るべきなのです。

### 発表の5つの部分

1. 米国の教育: 基本的な目的、構造、現実
2. アクセシビリティを高める米国における法制化の努力
3. 接続・移行とアクセシビリティを高めるための初等中等教育におけるサポート
4. 接続・移行とアクセシビリティを高めるための高等教育におけるサポート
5. 日本の大学にとっての挑戦

3

今日、私は5つのパートに分けて話を展開したいと思います。まず1つ目として、米国における教育の問題、その主な目的、構造、要素、現実の姿をお話しし、そしてその中で、どんな法制化の努力があって、アメリカにおいてアクセシビリティが高まってきたかということをご説明します。3つ目に、幼稚園から高等教育までにおいて、接続・移行、そして最終的にはアクセシビ

リティを高めるために、何が行われているか。そしてまた、この移行・接続とアクセシビリティの改善のために、特に高等教育への移行の点ではどのようなサポートがあるのか。5つ目として、日本の大学がどのようなチャレンジに直面するであろうかということについてもお話をしたいと思います。

### 米国における教育：基本的な目的・構造・現実

まず、アメリカにおける主な目的として、知識や技能といった、学生たちが高等教育で成功を収めるために必要な基礎をつくること。これが公立学校の教育の目的となっています。21世紀には、さまざまなニーズがあります。学校、職場、そして、これからの人生において21世紀の要請に応えるような学校教育でなければいけないと考えています。

既に前のスピーカーが言っていましたように、アメリカの教育システムを見てみると、さまざまな要因が浮かび上がってまいります。まず、標準、基準の問題があります。州としての標準もあり、国としての標準もあります。Common Coreという形で前のスピーカーが言っていたと思います。こうしたさまざまな標準をいかにうまく調節していくかということが大きな問題です。州は州で標準があり、国には国の標準がある。この2つをうまく合わせていくことが必要です。

もう1つとして、評価の分野があります。この評価というのは、それに関連する方々がさまざまな思いを持っている問題であります。例えば、NAEP（全米学力調査）というものがあります。2年に1回、約3万人の児童・生徒を対象として行われています。州はNAEPへの参加を義務付けられているわけではありませんが、やらないと、タイトルIと呼ばれる助成金を受けられなくなります。このタイトルIというのは、貧しい子どもたち、リソースの少ない家族の子どもたちに与えられる助成金です。例えば無料で学校給食が得られるとか、そうした特別な助成金ですので、この助成金を受けるためには、NAEPを受けなければいけないのです。

また、国がサポートする統一的な評価のPARCCというものもあります。これについては、多くの学校で疑義が出されています。というのも、非常に厳しいテストであり、これまでの認知的な思考度の強い質問からのシフトに適應するという、非常に時間のかかるプロセスを学生たちはやらなければいけないということで、マサチューセッツ大学も含めて、ここからの撤退を宣言している学校もあります。スコアが高くないと、州としても気になることです。そうしたスコアの低い州については、国からの補助金を受け取りにくいのではないかという結果にもなります。そして、SAT、ACTも、大学に行くために学生が受けなければいけないテストとなっています。

また、カリキュラムの問題があります。学校においては、全国的にもユニバーサルなデザインが求められてまいりました。社会、環境において、誰もがアクセスを獲得できる社会でなければいけない、ユニバーサル社会です。そこでは、子どもも、子どもの中でもさまざまな障害を持っている子どもたちが普通学校に行けなければいけない。もちろん、1つのモデルがあって全ての問題が解決できるというものではありません。子どもたちの中には、ニーズも障害のレベルも異なる子どもたちがいるので、その辺とのすり合わせも必要です。

そして、アクティブ・ラーニングについて。先生が強制するのではなく、子どもたちが主体的に学ぶということです。私たちのクラスの中には、既に読み書きができる子もいる一方で、貧しいためにこれまで1冊も本を読んだことがない子もいるわけです。ですから、子どもたちがどう

いう状況かを理解し、子どもたちに主体的にやらせるという、教育上の構成主義というものが非常に重要になってきていると思います。

アメリカン・ドリームというのは、皆さん方、お聞きになったことがあるでしょう。アメリカン・ドリームといいますと、社会においては機会の平等がなければいけない、そして、機会の平等がアメリカにはあるという考え方です。また、個別化、つまり、非常に個人主義な社会がアメリカの社会であって、個々の人のニーズがアメリカでは重視されるという考え方です。しかし、日本を何回も訪問した私の友人が言うには、日本はアメリカに比べて個人よりもグループに焦点を当てていると。そしてまた、アクティブ・ラーニングに焦点を当てている。つまり、子どもたちは、創造性の面でのスキル、批判的な分析、問題解決といった高次元的な思考のスキルを獲得しなければいけない。それから、アクセシビリティの問題もあります。

これらがアメリカン・ドリームを構成する重要な要素なのですが、しかし、実際はどうでしょうか。アメリカン・ドリームを理解した後、現実を見てみますと、現実と理想の間には大きな違いがあることが分かります。機会の不平等がアメリカには現存します。私たちが認識する以上に、アメリカは機会が不平等な社会なのです。

そしてまた、組み立てラインのような教育がアメリカでは問題です。私たちのクラスの中にはできる子どもできない子どもいるのに、中レベルの子どもを対象とした、非常に標準化された教育になってしまっている。それを組み立てラインのような教育と言っています。スキルが足りない子、能力が足りない子をきちんと見極めなければいけないのに、それができない。つまり、標準化された教育であって、中レベルの子どもたちにしか光が当たっていないからです。

そして、受け身である子どもたちというのも非常に大きな問題です。このアメリカの現実においては、先生がバーテンダーとして飲み物を子どもたちの容器に注いでやる。私がきちんとバーテンダーとして飲み物を作りますから、それを子どもたちは受け取るだけでいいのですよという考え方です。私は、大学に50年以上関わってきた人間として、こうした受け身の子どもたちというのは、悩みの種なのです。とても心配しています。子どもたちは今や受け身になってしまって、活発に学ぼうとしません。これは大きな問題だと思っています。暗記とか覚えることにのみ注力した教育です。つまり、Bloomの学習目標分類の下位レベルのことしか行われていないということなのです。

### 障害を持つ人に対する教育課題

また、障害を持つ人にとっては、アクセシビリティが高いとは言えない。障害を持つ人は、社会の周辺で生きるしかないという状況です。このアクセシビリティというのが、アメリカン・ドリームの1つの重要な旗でありながら、それが実現されていないということです。

ある女の子で、麻痺を病んでいて、車椅子を使っている子がいました。この子はどういうニーズがあるのかということを知らせておいたのに、トイレにアクセスがない。受け入れた学校はそういう準備しかしませんでした。ですから、トイレに行くことができませんでした。便器を開けてそこに座るといふことですから、助けてもらう必要があったのですが、そのことがきちんと認識されていなかったのです。こうした障害を持つ人の住みにくい社会というのが、アメリカの現実です。

それでは、高校で、接続段階で、大学で、なぜサポートを提供しなければいけないのか、なぜこうした橋を架けるという作業がそれほど重要なのかということです。まず、全ての社会の参加者のインクルージョンということが非常に求められているわけです。誰もが参加できる社会でなければいけない。人とは違うニーズがある子どもたちは、アメリカの社会では非常にパーセンテージが多いです。そして、その障害を持った子どもたちが高等教育を受ける機会を得るということは、非常に大きな益となります。

これは、障害を持つ子どもたちだけではなくて、健常者にとっても大きな学びとなります。どのように社会の一員として助け合うかということの学びを、健常者は障害者から得るわけです。そして、その障害者、健常者だけではなくて、先生も大きな益を得ることができます。チャレンジを持つ子どもたち、特別なニーズを持つ子どもたちを知ることによって、先生は先生として成長することができます。どのようによりよい先生になるかということは、障害を持つ人とのやりとりを通して学ばれることが多いのです。

そして、アメリカ社会においては、5分の1が特殊なニーズを持っています。ですから、少数派ではないのです。5人に1人ということです。こうした橋渡しをすることによって、接続をうまく行うことによって、多くのことが期待できます。つまり、その子一人一人の長期にわたる人生の成功への大きな効果を期待することができます。

また、大学では、健常者と障害者が協働し、同じ授業を受け、同じ活動をする。そうすると、こうした接続段階が効果的になされることによって、大学でも、大学後の社会においても、障害を持つ人は大きな成功を勝ち取ることができるでしょう。その結果、さまざまな能力、スキルを得て、社会に貢献することができると思います。

Lehrerさんという方が『ウォール・ストリート・ジャーナル』に書いた記事を、今思い出しています。ロンドン大学でのリサーチ研究の結果を出した記事だったのですが、そこでは、自閉症児を研究の対象としていました。オンラインでテストを受けた結果を自閉症児と健常者で比べてみたのですが、そのオンラインのタスクはどんどんと複雑になり、そして、問題を解くのにかけることができる時間が短くなっていきます。そして、だんだんと緊張が高まる中で、自閉症の子は非常によい成績を残したと。健常者の子どもたちは、問題が難しくなっていけばいくほど点数が落ちていったのに、自閉症の子は、そのタスクがより複雑になって、時間がなくなるにつれて、どんどんとよい成績を残すようになっていったという結果が出されていました。

そこから何が分かるかということ、今やアメリカでは、おそらく世界でもそうした数字だと思うのですが、76人に1人の子どもたちが自閉症児のスペクトラムにいるといわれています。自閉症児として診断される子の数は、アメリカでも、世界でも、どんどん多くなっていっています。こうした子どもたちが、将来、不利益を被らないようにするには、どうしたらいいのでしょうか。どういう雇用の機会があるか。社会でこうしたスキルの高い子どもたちを受け入れてもらうということは不可能ではないと、私は思っています。

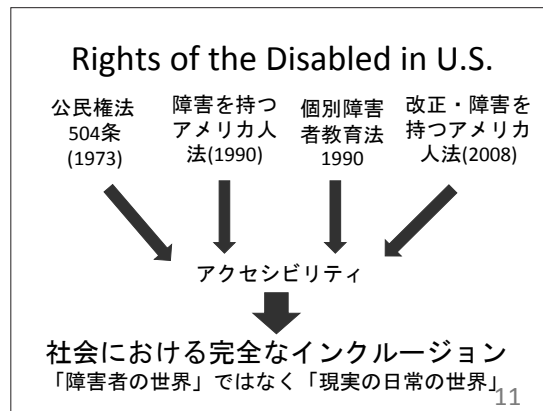
## 高等教育への接続サービスの有益性と法制化

それではここで、高等教育への接続サービスの一層の有益性というところに目を向けていきたいと思います。もちろん、高等教育において優秀な成績を上げれば、賃金も上がりますし、雇用

機会も増えると思います。興味深いことに、1990年から2005年の間、大学や他の高等教育機関への就学は19%増えています。これは、高校卒業後4年以内という期間です。また、この割合は、大変面白いことに増え続けています。より重い障害を抱えている子どもたち、自閉症、または認知的な障害を持っている子どもたち、以前であれば大学に入る機会なども考えられなかったような子どもたちに、法制の変化があり、機会が創出されました。重い障害を持った生徒でも、大学進学への期待が高められたのです。移行期という言葉は、後で申し上げたいと思います。それが成功を取めてきた要因だからです。

ということで、アクセシビリティが増しました。アクセシビリティへの長い登りということですが、周辺化されてきた他の集団、例えば女性、カトリックやユダヤ人、黒人、性的マイノリティといった方たちは、長く認知と権利と機会を得るために苦勞してきました。そして、社会に完全に参加して貢献できるようになるために、こういった闘いが以前よりも増えています。

ここで、アメリカにおける、障害を持つ人に対するいくつかの法制度をご紹介します。いくつか名前が挙がっていて、詳細は割愛しますが、公民権法の504条は、1973年に登場したものです。これがまさに、初めに、差別を受けてはいけない、プログラムやサービスに誰でもアクセスを持つべきだということを定めました。それから、1990年の障害を持つアメリカ人法 (ADA) は非常に有名なものでして、これによって、どのような場所においても、例えば雇用でも、公共的サービスにおいても、一般の交通機関においても、差別をされてはいけないということを決めました。



そして、個別障害者教育法 (IDEA) という法律が、1990年に施行されました。これによりまずと、全ての子どもは自由で、公的な教育を受ける権利がある。最も制約のない環境に対してアクセスを得る権利があるということを決めたわけです。できる限り、同じような年の子どもたちと同じような教育を受ける権利がある。つまり、IEP (Individual Education Program) がそれぞれの生徒に対して与えられるべきである。単に学校に行き後ろに座るだけでなく、きちんとニーズに合ったプログラムが用意されなくてはなりません。それに関して、セーフガードも設けられています。

そして、ADAAA (改正・障害を持つアメリカ人法) は、ADA (障害を持つアメリカ人法) を改正したのですが、より幅広い条件などを網羅しています。どのような障害を持つかというこ

とを幅広く捉えているわけですが、これによって、より多くの障害が含まれることとなりました。これによって、アクセシビリティが高まり、社会において完全なインクルージョンを目指すこととなりました。単に障害を持つ者の世界だけではなく、まさに現実の日常の世界に含まれるようにしたわけです。

リチャードという生徒がいました。彼は私のお気に入りの生徒でした。お気に入りの気にはいってはいませんが、大好きだったので。彼には重度の障害がありました。私が今まで見た中でも重度で、学習能力の障害がありました。スペルもうまく書けないし、注意も障害があつて、ハイパーアクティブで、多動症でした。いつも動いていました。しかし、このリチャードという生徒は、知的という意味では非常に優れていたと思います。彼は、いろいろな意味で恵まれていました。科学について、さまざまなことを何時間も多くの人の前で語る事ができたのです。彼のプレゼンテーションは、今でもよく覚えています。本当に素晴らしい内容でした。

このリチャードは、公立学校に行っていますが、IDEAによって、IEP、先ほどの教育プランの権利を持っていますし、彼のニーズに応じてもらうような権利もあるわけです。そして、ADAのおかげで、社会で差別をされないという権利を持っています。

リチャードは、ボーイスカウトに入りたいと考えていました。これは、IDEAでは網羅されていませんでした。しかし、公民権法504条によって網羅されていました。ということで、ボーイスカウトにおいても彼に誰かがアテンドをして、ボーイスカウトに参加できるように、そういった手順が取られました。アメリカの教育における障害を持つ者の権利は、非常に長い道のりだったと言えると思います。

1975年以前、障害を持った子どもたちは、学校に通う権利がありませんでした。ギャリーという子は私の近くに住んでいました。彼は、知的発達遅滞を持っていました。そして、発作などを起こして、コントロールできなくなってしまいました。それで、1週間学校に行った後、もう学校では面倒が見られませんかと言われてしまったのです。それ以外にサービスはありませんでした。1975年以前は、障害を持った子どもたちには学校に入る権利がなく、家庭で親が面倒を見て、特別な施設か病院に入れられてしまいました。その資金は、政府が提供していたわけです。

しかし、1975年以降、就学権を得ることができました。無償で適切な教育を受けることができたのです。最初は、教室の後ろでただ座ることになってしまいました。特に特別なプログラムなどは用意されなかったのです。しかし、今は特殊教育学級があります。また、重度の障害を持つ生徒、通常のクラスでは教育が受けられないような子どもたちの学級がありました。目の見えない子どもたちや、耳の聞こえない子どもたちの学校もあったわけです。

### 接続・移行とアクセシビリティを高めるための初等から高等教育におけるサポート

私は、身体的に重度の障害を持つ子どもたちのニーズに応える学校でコンサルタントを務めていたことがあります。しかし、これは非常に少ない割合でした。とはいえ、自閉症の子どもたち、沢山のケアが必要な子どもたちは、支援は必要ですけれども、公立学校に行くことができるようになりました。

グレンという子どもがいました。彼は、高校で音楽の授業に出席していました。私もそこにいたのですが、一度、雷がありました。1分ほど雷があつて、そこでアラームが鳴ったのです。グ

レンは、最初、怖がりました。ティーチャーズアシスタントがグレンをよく見ている、すぐにはグレンのところに行って干渉しなかったのです。じっと観察をしました。そして、グレンの隣の子どもが、「大丈夫だよ、グレン」と言いました。その子どもが、グレンをなだめることができました。

幼稚園でも、代用教員が自閉症の子どもに列に並んでもらおうとしていたけれども、できなかったことがありました。他の園児が、「そうじゃないよ」と言ったのです。「先生、その子の肩に手を置いて、目を見て言えば、2回言えば聞いてくれるよ」とアドバイスをして、実際、そうなったのです。このような形で、子どもたちはこういった移行期にお互いに支え合うのです。

障害を持つ子どもたちが高校から大学へ移行する、接続するという点に関して、法律によって、障害を持つ全ての生徒がそのニーズに合ったプログラムを提供されるように、IEP（個別教育計画）、それから移行・接続計画を持つということが定められています。州は、ILP（Individual Learning Plan）を選んだところもあります。非常に多くのリソースなどを得て、オンラインなどで勉強することができるものですが、これは16歳の段階から得るところが多く、一部は14歳からです。両親も、将来に対してのこの計画に関わります。親の、そして子どものビジョンはどうか。職業トレーニングを受けるのがビジョンなのか、高等教育を受けるのがビジョンなのか、そういったところに着目します。

ということで、保護者と子どもは、就学先とプログラムを決定する法的な権利を得ています。それによって、効果的な移行が行われるわけです。そうすることによって、この子どもたちは、最も制約の少ない環境へのメインストリーム化が行われます。IEP、ILPといった特別支援教育計画が義務化されています。これが3歳から22歳までの範囲です。そして、多様性に応じた学習指導を教員たちがニーズに合うように行います。また、障害を持つ子どものインクルージョンのための教師の専門職的な訓練があります。そうすることによって、移行を得るためにどんなニーズがあるのかということ特定します。また、専門性を有した専門職などを活用して、これを達成する努力を行っています。

中等教育接続・移行サービスにおけるシフトという意味でいいますと、2004年以前、中等教育接続・移行サービスと学習のための学業標準の統合は、ほとんどありませんでした。こういった移行サービスは、限定的で、移行計画がなかったこともあります。あまりにも先を見すぎているということがありました。そして、高校、大学におけるカリキュラムは、あったけれども、その橋渡しがなかったのです。これは整合性を取る必要性があったわけです。

## 移行の保障と学生支援

2004年以降、このサービスに対する考え方が変わっていきました。障害を持つ子どもたちに関しての高等教育、21世紀に必要なスキルは何なのかということに着目しました。衛生、安全、コミュニティとか、インタラクション。そして、この移行サービスの提供。また、学生にとっては、高校の段階で、特別なニーズを持った子どもたちがフォーカスを持つということが大事です。ここでカウンセラーが割り当てられ、障害のある子どもたちには、このような移行がきちんとあり、必要なスキルを発達させることができ、必要な支援が受けられるようになりました。ですから、限定的なサービスに限られるということなしに、少なくとも10の大学で、障害のある学生

も寮に住めるというような制度もできました。

一番重要なのは、公立学校と高等教育の間の整合性と移行性を保証するということです。まず初等学校から大学。私の教えている学校でこのようなプログラムに移りました。例えば理科のクラスは、最初から大学の教授が小学校の先生と一緒に働きまして、大学の教授は、いつも小学校の生徒に、うちの大学に入学し、われわれの大学の科学の学科に入ったらという前提で話をし、子どもたちにそのような見通しや希望を持たせて、高等教育への橋渡しをします。プログラムやプレゼンテーション、ミニコースなどもあり、地域の企業や学校との共同プログラムを橋渡しし、会社でのインターンシップをやる、大学での小さいプログラムに参加するというようなものを次々と実施しました。

ジェリーという子は、高校の授業を取っていましたが、大学のコースも同時に受講していました。高校教育の完遂と高等教育への接続を促進するための機会として、高校と大学に同時に在籍していたわけです。そして、障害を持ったものを含む学生のためのアレンジとして、そこのキャンパスに住むということをこの高校生にも許しまして、障害のある学生が自立生活を送るスキルの発達を促進しました。同じ大学に通う仲間を作り相互支援を提供するポッセというシステムがあります。これは、西部劇時代のシェリフは民兵を何人も連れているわけですが、そこから来ているポッセファウンデーション<sup>\*1</sup>という財団が行っています。大学を1年でドロップアウトしてしまう学生の調査をしますと、仲間がいてくれさえしたらこんなことはなかった、ここで頑張れた、踏みとどまれたという学生が多かったので、例えば10人ぐらいを高校からの仲間として選び、お互いをよく知り、お互いを助け合うようなトレーニングをして、一緒に大学に進学して、一緒にポッセとして大学生活を送るというシステムをつくり、それに奨学金を出したわけです。

スタンフォード大学にも、そのようなプログラムがあります。私は、そこにいたときに、このようなプログラムに関わりました。スタンフォード大学にあるプログラムで、OAE (Office of Accessible Education) というところがありまして、これはマサチューセッツ大のアマーست校にあるのですが、ここにはディスアビリティサービスというサービスがあります。

## 日本の今後の法制

- 2016.4.1「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（「障害者差別解消法」）
- 目的: 国連「障害者の権利条約」の締結前に新たな法的枠組みを作る
  - 目的: 差別の問題をゆっくりと解決すること（にあると考えられる）
  - 現状では差別的行為に対する罰則無し
  - 学校を含む行政機関、公的組織は、個人の特別のニーズに基づいて合理的な配慮を提供しなければならない
  - 店舗、レストラン、その他の商業施設に対しては、単に「努力目標」（ペナルティ無し）

32

基本的に、20人に1人は、何らかの障害を持った学生がいると統計的に分かります。さまざま

※1、<http://www.possefoundation.org>



まな障害のカテゴリーがありますが、目には見えない障害もたくさんあります。例えば、LD（学習障害）を持っている子、心理的な問題を抱えている子などです。日本の児童・生徒の中にも、統計的に見れば、必ず一定の割合でいるはずで、けれども、日本も変わってきていると思います。最近、法制的にも障害のある児童・生徒・学生を支援しなければいけないということで、2016年にはこのようなことが実現すると聞いております。これは、国連の条約を日本が批准したことによりまして、2016年には、日本でもこれらが国内法として整えられ、実現すると伺っております。

どこで、どのようなサービスを障害のある人に提供するかということで、どのような提供するリソースを持っているのでしょうか。そして、障害のある人々が実際に社会の一員として日の当たる場所で活躍できるようになるのでしょうか。

いわゆる医学モデルでは、障害は欠陥と見られますが、社会構成主義でいえば、潜在的な能力を持った社会の重要な資源と見られます。これから高等教育の中で、私が先に述べた障害センターのようなより多くのサービスやサポートを導入できるか。そして、これは、学生がこれから希望として、目標としてのぞめることなのか。今、公立学校に在籍する障害のある子どもにとって、高等教育機関へのギャップを埋める橋渡しが近い将来にできて、社会のほうから、障害のある学生にとって、あなたも高等教育で十分に成功裏に学業を修めて社会に出ていくことができるよ、仕事に就くことができるよという激励を受けることができるかどうか。これを、ぜひ皆さんと考えてみたいと思います。

### ○質疑応答○

**【発言者 1】** R大学のYと申します。本日は、貴重なお話をいただきまして、ありがとうございます。

アンドリュー・エフラット先生に、1点、質問があります。アメリカではアドミッション・オフィサーが大学入試の選抜を主に行っていると聞きました。日本も同じような流れになる可能性もあると思うのですが、日本には、そういった専門職の育成という仕組みがまだあまりないと思っています。そういった選抜制になった場合に、日本でどういった方法で育成を行うべきなのでしょう。また、どういった人物が入試の選抜を行ったほうがいいのでしょうか。もし何かご見解があれば、教えていただければと思います。

**【エフラット】** ご質問、ありがとうございます。私が関与した全ての機関は、アドミッション・オフィスには何人もの人が関わっていました。そして、さまざまな機能があります。外へ出て行って学生をリクルートしたり、親と会ったり、先生と会ったりしています。そして、志望者の履歴書をレビューし、その学生に関する情報を集めます。ですから、アドミッション・オフィサーには、さまざまな使命、機能が期待されます。

私がこれらの役割をきちんと果たせる人というのを考えると、さまざまなランクを経験した人がふさわしいと思います。そして、トレーニングは、高等教育のプログラムと一緒なのですが、修士から博士のコース、高等教育の中の修士等がそれに相当します。アメリカではそのようなプログラムがありますが、世界の他の国で他にあるかどうかはちょっと知りませんが、おそらくカ

ナダなどにはあるのではないかと思います。ヨーロッパのある部分にもあるかもしれません。

そして、高等教育機関のプログラムの中でさまざまな高等教育に関する課題の知見を学び、それをどのような形で大学の入学審査に反映させることができるかということです。例えば、学長がアドミッション・オフィサーになりますと、それをさらにどのような形で整合性を取ってアレンジするかという、より複雑な役目になりますが、アドミッション・オフィサーは、志願者の背景、潜在性を、標準的なデータを超えて注意深く評価できる人。それから、さまざまな地域の優秀な高校などと関係を持ち、コミュニケーションができる人。そして、そういった機関とアクセスがあり、協調関係をつくることのできるような人が望ましいと思います。これが必要な資質だと思います。

**【発言者2】** スティーブン先生は、非常に多様な生徒さんに関わっていらっしゃるということなのですが、実際に先生が育成の方法として特に意識していらっしゃることは、どのようなことなのでしょう。いろいろな生徒さんがいらっしゃるわけですが、どのようなことを意識して育成に携わっていらっしゃるのでしょうか。少し例をご紹介いただけないのでしょうか。

**【スティーブン】** ご質問、ありがとうございます。いつも難しいことだと思うのです。いろいろと違うニーズがある子どもたちと渡り合うわけですから。公立大学で、そして、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学で、多くの人に会います。大学においては、法律によって、こうした子どもたちにスペースを与えること、コンディションを与えることが求められています。そうした基準に基づいて、個々のニーズに見合うプログラムをなるべく提供したいと考えています。

そして、公立学校では、往々にして、先生が回転ドアの役を果たすといわれています。つまり、一人一人の子どもたちが回転ドアを通じてクラスに入ってくる。そして、その子どもたちに対して、われわれは、例えば職業訓練士も入ってくるなどして、さまざまなプログラムを提供する必要があります。ですから、それぞれの段階で、それぞれのニーズのある子どもたちに対して、きちんとそのニーズに答えていくということが非常に重要であると考えています。時には外に出て行って、そのニーズを満たすこともあります。ですから、組織者であり、マネジャーでありということが求められると思います。

クラスの中では、いろいろな物事が起こります。ですから、私にとってチャレンジというのは、大学においては、まず、クラスの中で子どもたちに対してきちんとしたスペースを与えることです。例えば、目の見えない子どもたちもいますので、点字で情報を与えることも必要です。子どもの中には聞こえない子もいるし、体に障害を持った子もいるわけです。

スペンサーという子のことをよく覚えています。

スペンサーは、アスペルガー症候群の子どもでした。とても賢い子で、音楽の能力も高く、知的能力も高かったのですが、オーガニゼーションのスキルは欠けていました。また、社会的に適切な行動を取ることができませんでした。こういう子どもたちにとって何が必要なのかということを考え、その子どもたちにどこまで何を提供できるかを考えました。

スペンサーについては、いつもグループワークをやりながら、いろいろなグループをつくって、その中にスペンサーを置きました。どのグループの中に置くと、スペンサーがきちんと機能することができるか。そして、どんなグループの子どもたちと友人になりたがっているのか。そうしたことを見ていきました。そういうプログラムを通じてスペンサーと話し合いながら、スペンサー

のためのプログラムを作っていました。

スポンサーは、人との関わりということで問題があったので、その計画を作ったときに、彼と話をしながら、彼がいろいろと言ってくることに對してすぐにフィードバックを私からするようにしました。それらに基づいて、クラスにもフィードバックしました。

ですから、こういうチャレンジがある子どもがいたら、きちんと対処していきます。そうすることによって、私は教える側として成長することができるし、クラスもよりよいクラスになります。スポンサーについては、よりよい、前向きな変化をクラスに起こすことができたと思います。私だけではなくて、生徒が、そして彼自身も変化を起こしていくわけです。

こうした大きな成功をこれまで取めたわけですが、それは高校だけでなく、大学でも同じことです。ですから、障害を持った人も含むグループが大きな成功を得ることができます。私が最も尊敬している障害を持った子どもは、大学でも本当に大きな成功を取めました。スティーブも含めて、非常に特別なニーズを持った子どもたちは一生懸命勉強しました。非常に強い決意を持ってやってきました。勉強のためのスキル、就職に必要なスキルも、一生懸命頑張って獲得していきました。そして、多くの成功例を、私は障害を持った人から得て知っています。

**【発言者3】** T高校のSと申します。本日はありがとうございます。エフラット先生に質問があるのですが、5番目のスライドの「いくつかの恐ろしい像」。この現状についてなのですが、上位の大学と、中位・下位の大学によって、このパーセンテージは違うのではないかと思うのですが、上位の大学ではこういう現状があるのかどうか。これが、中位・下位の多くの大学に對応するものではないのかということを感じたので、その現状を。あとは、上位の大学と中位・下位の大学が抱える高大接続の問題は、また別にあるのではないかと思います、その辺のことをお聞かせください。お願いします。

**【エフラット】** とてもよいご質問をありがとうございます。これは全国的な平均値です。1つのカテゴリーは、最も一般的なランキングシステムであり、アメリカで発表されている資料ですけれども、卒業率ですね。これが一番分かりやすい指標として挙げられています。そして、非常に高い評判のある大学、ハーバード、プリンストン、スタンフォードといった一流大学は、非退学率、定着率がずっと高いです。90%以上の学生がやめないで残りますし、6年間以内に卒業する率がずっと高くなります。40%ではありません。

入るときから一番優秀な学生を採っているからというのが、その1つの理由ですけれども、また、教員側、ファカルティ側も一番優秀な人たちを集めていますし、チュータリングやコーチングといった接続サービスに使えるリソース、心理的な相談やサポートのサービスも充実しています。ですから、在籍率も高くなるし、卒業率も高くなるわけです。

シモンズカレッジのような中の上程度では、1年生から2年生に進むときの定着率、すなわちリテンションレートの80%ぐらいです。つまり、20%ぐらいはやめていくということになります。これは、私たちの学校の非常に大きな懸案材料となっております。というのも、募集のときには、非常に気を使って採っているからです。中の上ぐらいで、2割ぐらいの学生がやめるということです。

卒業率になりますと、60~70%ということで、かなり評判のいい大学でもこれぐらいしか卒業していないというのは、非常にショッキングな数字だと思います。大規模な、いわゆるマスと

いわれる大学で、2万人とか3万人とかという学生数があると、その中では、やはり割合からいって、やめてしまう、卒業できない学生も、数として多くなっています。

そして、コミュニティカレッジのリテンションとか卒業率になりますと、もつとずっと低くなります。コミュニティカレッジの卒業率になると、20～30%ぐらいに落ちてしまいます。先ほどノーラからも言いましたが、卒業できない、あるいは退学した学生は、どういう要素がその違いを生んでいるのか。機関の性質によることなのか、あるいは、学生の個人的な敗北感とか喪失感なのか。また、スタンフォードのような大学でさえ、学生が退学してしまうことを大変懸念しております。

そして、うちの学生ですが、アドバイザーが寮と一緒に住んでいまして、週に1回、あるいは隔週に1回、自分が受け持つ学生と夕食を一緒にします。そして、小さなグループをつくって、その中の1人ずつ、必要に応じて支援するようにしています。小グループ支援活動ですね。ですから、非常に評判のよい、あるいは優秀な大学だということでも、ドロップアウトの問題は存在いたしまして、小さな学生のグループをつくって、それぞれの学生が帰属感を感じられるような環境をつくることを心掛けています。

**【発言者3】** ありがとうございます。

**【発言者4】** C大学のAと申します。いろいろと示唆に富んだお話を、ありがとうございました。お二人の先生方にお聞きしたいのですが、今、スライドに出ていますように、お話にも上がりましたように、4年制大学の学生の50%が補講を受けるような状況であるということとか、あるいは、受け身の子どもたちが非常に問題になっていて、暗記一辺倒の学習しかしないというようなお話があったと思います。これは、日本と米国でまた状況が違うとは思いますが、そういったことが米国でも問題になっているということに、少し驚きを覚えたわけですが、主に何が原因でそういう現状になっているか。お考えがありましたら、お聞かせいただきたいと思います。

**【エフラット】** 今お聞きになっているのは、学生たちが、例えば勤勉に学習をしないとか、その理由でしょうか。

社会学者としては、さかのぼって考えていきたいと思います。つまり、社会に一般的な変化が訪れ、学生たちが社会に関与していく際に、ロールモデルをマスコミなどに見いだしてきました。例えば、文化の中での英雄は誰なのかとか。

アメリカの社会では、日本の社会と比べると非常に驚きなのが、プロセスに対してあまり注意を払わないことです。日本に来て思いましたのが、例えば、細かいところやプロセスに注意を払う、そして「頑張る」といった考え方がありますよね。その考え方は、アメリカの文化では失われてきました。どちらかという、ロールモデルとか英雄とかに影響されて、そういったものが学生にとっての模範になってしまっている、即座に答えを得るような、心地のよさを求めてしまいます。これが一般化した考え方ですので、勤勉で成功している生徒には当てはまらないですが、一般的にはそのような現象が見られると思います。ノーラもそういうことに言及していました。倫理観といったものがない学生はそうだと。

**【スティーブン】** 最近聞いたことなのですが、例えば、グーグルで1分以内に答えが得られるならば、テストにはその問題は出ないだろう、評価ツールにも乗らないだろうと聞きました。いろいろ考えたのですが、われわれの学生はソーシャルメディアや技術、ゲームといったもので道を

失っています。そして、学校もフォーカスを失ってしまうわけです。ティーンエイジャーの多くが、この技術の文化というものに慣れ親しんで、こういった技術に費やす時間が非常に多いことが課題となっています。

アメリカは、他の国と比較しますと、数学や科学、読解ではトップではないのですが、アメリカがいつもトップの領域があります。それは自己認識です。自分は大丈夫だ、うまくいっているというような気持ちはあります。私にとっては、学生が必要としているニーズは何なのか、どうやって彼らを関与させるのか、本当に何を学びたいとしているのかということをつかまなければいけないと思います。

ということで、教育側としては、われわれが使っている教材の多くは、学生が自分の世界には関係ないと思っているものが入っていると。私もプロジェクトやコミュニティに学生と一緒に参加しておりますが、そういった中で、どうやって彼らにとって世界を変えるような気持ちになる情報を与えられるか。学習というのは、その技術、そういったものがありますので、非常に静的なものになっています。そして、受動的になってしまっていると思います。「あなたは大丈夫ですよ」「すごくいいですよ」というようなフィードバックしか得なくなってしまうのですね。こういったこと全てに起因して、われわれの社会の状況をつくりだしていると思います。

日本の学生さんの勤勉さは、本当に素晴らしいと思います。それは、アメリカでは失われてきたものだと思います。ですので、生徒たちに与えている課題や教育といったものに基づいて、どうすれば学習や活動や教育が自分たちに関係しているものと感じてもらえるかということを、教育者として考えなければいけないと思っています。

**【発言者4】** 学生が求めるものが何かというよりも、学生にどういったことを学ばせるべきか、ということを提供する側がしっかりと考えて、教育することが大事ではないかと思っています。学生はどうしても、プロセスを考えるよりも、ゲームと同じような答えをすぐ求めたがります。そういう意味で、学生に即した教育というよりも、われわれが、人類が、どういったことを学生に学んでもらいたいかということを、しっかりと提示することが必要だと思います。

**【エフラット】** はい。そういう質問、あるいは考え方は、よくいただきます。私が教育における一人の指導者としてあがめているジョン・デューイという人がいます。デューイは、次のように言っています。

子どもは、彼らにとって面白いものを学びたがっている。私たちが教育者としてやっていることの多くは、こうした非常に賢い子どもたちをきちんと特定し、きちんと学ばせることである。全ての子どもに同じことを標準化された形で教えることによって、教育は工場と化してしまう。そうではなくて、その教育がよい教育であるために何が必要かということを中心に考えて、彼らの関心を生かしてやることも必要である。そうしないと、彼らは、教師がやらせたいことではなくて、ゲームばかりやってしまうかもしれない。自分の心が向かないことについては、何もやってくれないかもしれない。そのために、やめてしまったり、退学をしてしまったりする生徒がいるかもしれない。そうした問題を根本の原因と考えて、プログレッシブ・エデュケーション（進歩主義教育）として、哲学の一環として論じてきた、これまでの経緯があります。

その教育をきちんと正しいやり方でやらないと、それに対してバックラッシュ（反動作用）が起こり、その結果として、教育の標準化、あるいは工場モデルのようなものができてしまうとい

うことなのです。

**【スティーブン】** フロリダに、私の仲間が1人います。まだ子どもが若いときに、そこで休暇を過ごしたことがあるのですが、そこはマナティが泳いでいる場所だったので、ここではボートを使わないでくださいというサインが出ていました。こういうことは子どもにとってとても重要で、ここで子どもたちに対して、野生生物を守る法律をつくっていくような動きが、子どもの側から出てくるようなプロジェクトを考えてみたのです。そして、子どもたちを現場に連れて行って、専門家と話をし、その結果として、子どもたちはある法律の原文をつくりました。そのことがきっかけとなって、野生生物を保護するような1つの条例になったということがありました。これが、フロリダ州の野生動物を守る1つの大きな法律となりました。

フロリダ州の議会の議員に会って、立法者である彼らに対してきちんと話をし、非常に活発に子どもたちがそうした環境関連のプロジェクトに参加してくれて、その結果、将来、科学を志してさまざまな報告書を作った、あるいは、基本的なスキルを身に付け大学に行って、結果的に能力をもっと発揮し、その後のキャリアにこうした子どものときの計画を結び付けていったという大きな例を、フロリダで知っております。

ですので、まず子どもたちを参加させること。つまり、子どもたちにとって関連のある、そして意味のある活動、社会にとって意味のある活動に、早い段階から子どもたちを参加させていくことが、非常に重要だと思います。そのような形で教育を展開することによって、子どもたちに関連のある教育をきちんと提供することができるわけですから、それが21世紀に生きるわれわれの役割だと考えています。

**【エフラット】** 子どもたちの関心がある物事、その他のスキル、例えば作文のスキルなどを自然に子どもたちが獲得できるような、そうしたプロジェクトに参加することによって、ものを書く、エッセイをつくとといった付随的な能力も同時に獲得できると思います。

私がこれまで教えてきた中で最も力のあったコースなのですが、大学の学生に、ある選択肢を与えました。つまり、標準的な概観のコース、もう一方では、場所はカナダだったのですが、チームとしてチームワークをつくるようなプロジェクトに参加をさせる。その結果として、ポリシーペーパーを作って、王立の教育委員会に提出するということです。このプログラムに参加した学生さんは、そうしたポリシーペーパーを作って、報告書として出しました。ですので、最初の段階から学生が非常に積極的に参加してくれたコースとして、カナダにおけるポリシーステートメントをつくったコースを覚えています。私からも付け足しで申し上げました。

**【質問者4】** どうもありがとうございました。

\* 以上は同時通訳された日本語を録音し文字化したのを編集して掲載している。それについては、講演者と通訳の両方から許諾を得ている。